

## 「子グモの観察(2)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

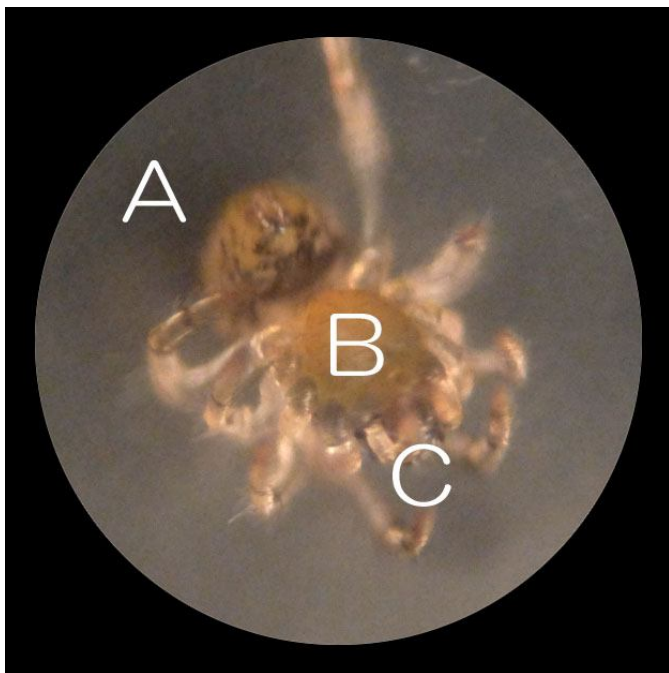
### (4) 子グモの生活

クモ(蜘蛛)類は、不完全変態なので、孵化したばかりの幼虫でも、姿は成体(親グモ)とほとんど変わらない。卵のうちで孵化した幼虫(子グモ)は、しばらく卵のうちの中にとどまり、一回脱皮してから出て来るらしい。今回観察したクモは卵のうの形状や、子グモの形から、オオヒメグモと思われる。屋内や軒下、納屋などに、極めて普通なクモである。

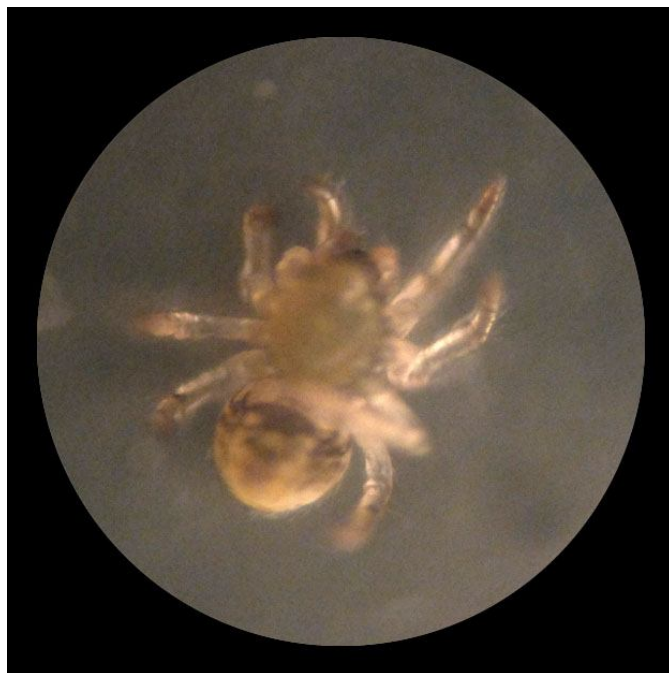


「オオヒメグモの卵のう」 大きさ1cm前後。

### (5) オオヒメグモの幼虫(子グモ)を撮る



チャック付きのポリ袋での顕微鏡観察の利点は、内部の空気の量(ポリ袋の締め付け方)で、子グモの動き方を制限できることだ。上の写真は、少しポリ袋の空気を抜いて、子グモの「自由度」を奪って撮った写真である。Aが「腹部」、Bが胸に相当する「頭胸部」、Cは8本の肢とは別の「鋏角」という「あご」に相当する部分だ。この写真をよく見ると、「腹側(下面)」からの姿とわかった。



今度は、チャック付きポリ袋を裏返しにして、背中側から見た顕微鏡写真である。これも「ポリ袋顕微鏡観察」の利点である。いずれも40倍の倍率で十分で、今度は非常にクモらしい姿に写っている。体全体に対して頭胸部が異常に大きいのは、体の大きさの割に「脳」が大きいためだろう。



観察中も子グモは、隙間を探して動きまわり、その間も糸を吐き続けていた。次第に自分の吐いた糸で動きづらくなり、撮影しやすくなってきた。上の写真は、斜め上から見た構図で、実に「クモらしい」姿だ。

ここまでの写真は、すべて「反射光」で撮影している。顕微鏡のステージの上から白熱灯のZライトで照らしているの、少し黄色っぽく写っている。透過光でも撮ってみたいと思った。